



遠近新聞
第十六號

定價一叙



西垣文庫
文庫10
7265
14



特 文庫10
7265
14



遠近新聞第十六号

慶應四年五月十三日

拙文不復善耶

一回賜覽柳筥

富多美浦迎福七五三繩

八雲のり出雲の国は八百萬神の旅の神名月末の
頃より長閑あり。小春の空は神風の伊勢の太麻降臨
初る處は五條通り筋。或は庭先前後門何をヂヤラク
アホラレイと笑ふ門は福も来む。義太夫三絃あは
で大きあ。罰をぞ神速に授給ふ。余へも早くと牛川
原の通り飛く段いと都の市街の下の方。鴨水越て祇

遠近新聞第十六号

八



5725

園巷うかど娼妓さや川町見とバ見とれてホント町。
あしれそや痴呆子桃源もふ降根てく曲輪と遊女藝妓。
配膳もかど侍魂神も上とく来て上の京昨日の趣向今
日又又明日をの川又流と行や変る景色ぞ愉快哉抑も
勢神ハ十ガ七残て三分の神くと鴨の下上香取神春
日明神鹿島神惠徳も今又熱田神医師の祭る二柱一
柱ハ少彦名ゆへ大黒尊そ多かりり。是ハ不思議と
い岩も清水ハ八幡宮の守札鳩ガ啣て二羽ま千てる町屋
通言飛降る余ガ家又ふてくれ竹の伏見稻荷ハ福
の神札ハ散漫飛落。其中ハ金像大黒亦希有矣。何と志

聖り天摩利支天顛て落る所も本家大丸り。又至寶の二
分小判大判さくも降る評判我も神恵と強欲て内実
心中いつくしむ。辨財天女小肖と女赤裸してやめと
しも。天賣美女の像どとも。宮比神と紙偶の面ど共。女
も江府の娼ど共何り過妻合ぬ話合ぬ理あり全身露
裸。不論其故遠いと。誰人を目的と落来と。伏見の土焼
の布袋和尚微痼もせん又降臨奇哉珍事ハ浮世又。
さん有馬とら有まの水天宮。し四国極尤も象頭山鎮防火災を
頼む愛宕山東海道至其名顯著池鯉鮒明神亦貴哉。信
貴又祭まる昆沙門天。天満宮ハ故里の縁故のゆれハ

約ちやく結くわつよ。ふらて北野のと言騒さわく。北日の朝あさより降くだ初はつて。
ほど山城しやうの古川ふるがわのふりふり。羽は東とう石いしの明あき
神かみと何神なにかみぞ。由よし来きの何等なんとう哉や。白しろ嶺嶺の神かみの混まりて諸しよ
佛ぶつさへ。緩ゆる舒ゆる落おちて清きよ水みづの。觀くわん音いん薩さつ陀た地ぢ藏ざう尊そん祐ゆう天てん僧そう正せいの
名号なごう。或あるも六字ろくじ南無阿弥陀なむあみだ。日蓮にっれん大師だいしの蔓まん多た羅ら。門徒もんたの
家いへに迷まよ歩あゆ。顛てんて来きとも一向いこう。不敬ぶけい罰ばつり燃も燒や。湯ゆ火か傷やけど
の護符まがひ間まは合あひ。四よ辺へん近隣きんりん防ぼう火か騒さわ動どう。まらぐいつ軒けん
燒や失し落おち着ち。六ろく官くわん通つう如に是し類るい。実じつは百ひやく分ぶん中ちゆう。一いつ夷い三さん郎らう虚こ
空くう藏ざう。去さりふふ。子こ母ぼ神かみ。急いそに信しん仰やう者しや。又また成なり田でん
山さん。大だい小せう。不ふ動どう。の孔くわん守しゆ。三十さんじゆ番ばん神かみ妙めう見けん宮みやう。能の勢せいを尤なほも多おほ

いとい数かずえ上うままの八はち百ひやく万まん。神かみと佛ぶつをまき混ま交まて。散ちや
紅くわう葉えつの紛ま乱らんと。ふれハ俄が然ぜん踊おど躍り。篤あつ实じつ老らう叟そう亦また道どう化け熊くま。
娘むすめの小こ袖そで引ひいて。光あき禿く頭かぶ上うへ假かり鬢かみ粧け多おほ情じやうの壯さう婦ぶ真ま率そつ。
男おとこ様さまは扮はて紺くわん色しき木き綿わた外あ套そで狭せま袴はかま其その表あへ。友とも仙せん洙しゆ美み
麗う。黒くろ画えの龍りゆう。電でん光くわう。又またハ山さん三さん濡ぬ燕えん。とんて往い還げん
の編あ笠がさを。覗のぞて見み。是こ男おとこ是こ女め。隊たい伍ご不ふ整せいて。拍ひ子こ節せつ
度ど異い口くち同どう調てう其その謠やう辞じ。
米こ小こ須す貼か紙し。破や則すなは復た貼か。不ふ善ぜん耶や。不ふ善ぜん耶や。豈あ不ふ善ぜん耶や。
と丁ちやう稚ち弱じやく嬢じやう鋪ふ長ちやう公こう。炊くわい夫ふ素そ是こ旧きう里り。村むら巷ぢやう祭まつり祀い。慣な
事こと也なり。下げ婢ひも童どう形かたち。少せう男おとこハ嬢じやう態たい主しゆ翁わうも家いへ婦ふ老らう爺や。小せう

童妝共是変幻自在轉化無量無底舞場の東都様祇園
歌曲の慣手技笛や太鼓や鉦小鼓らまけ痴漢の大茶
番俄設狂言急構工夫拙速為妙神道者細筆を烏帽子
は燈灯の匣をば胸前に揺動と高間が原の諸式一般
今うら下落りを見よ伊勢の太神可尊哉と老实顔
く行も有思案も別よ在原の東下を今日爰所か
思ひ月毛の駒又乗る貴嬢ハ群中玉の顔貞石や瓦の
貞ふ者も同等年齢打揃ひ皆白丁の供仕立一人坊主
の由香取鬘もあくりて善哉其滑稽の後々後頭鉢
卷巖烈紙製の大槌鍔葉造の韜光提燈手鎗さげ不言

而可知義士の徒大津繪揃へ又平吹ド、吶のちり
繪矣哉巧拙雜陳千態万状内よハ亭主竹竿長く鋪頭
柱よ仰縛し客席も世人よこせの前天井底や庭の隅
拂い清りて降臨の灵符を尊崇新筵を敷連ぬはく神
酒神餅親類懇友相招て神酒拜戴早朝未愕腹機會
三四盞傾之則は何事不善耶後房よハ山の神愛娘の
化粧で心神飛揚外より驀然羅舞侵入土足の俣でも
不復佳哉根太も自迷も抜し果て既是一月餘ぬりよ
あり更舞且躍貴賤勿論日夜の差別活計の險難も忘
却商戸ハ賣買休之職人ハ道具箱さく何處へア。流

用才覚無策不為矣。わりの狸の腹鼓うらけと状態
 をさるの智恵結局と其尾を現出して衆人訴窮の涙
 雨降るの町方計ゆへ。武家の出て都下一般不遺小區
 悉皆是善矣。み^南ふ^北東より。西陣徒脚て機杼
 休。縮緬類の可驚ときけと甲斐あ記西洋布の價も
 漸く躍り出し。五紹もあらく鳴動て。オヤ可恐哉と言
 あつら。傍若無人と着るどつみ。長き刀も故障あく。目
 出度室又納まる。賢君が聖代こそ千早振諸神の惠恩
 の^天めが下降れば降るやど賑やうちうららぬ。
 千^雨早振神の下るめめ^{諸式}のい^原上るなりとむ

旅立よいのこの国の道うへて都の守衛ははどふ神の那
 末も東武の方より降臨神は縁ある神泉苑の町は滑
 稽老爺放言在宅の夜半の徒然。旧年往復手磨とる。
 古草文庫と對坐大和居炉は面杖を。はくく思按しと
 晩。はとで返魂紙の戲作寐言半分出放題実の燈
 臺鞍馬山鼻をば高ふしてこても。木葉天狗のはくく
 と。あやの軒は二人し。後日の談柄は松油きんと
 まれば明て行烏天狗の声さくも。らわうくとつみ
 こやあつらと。

慶應の三つかとく如比年祝月

婦多浦筆司

落太郎 神尾復晴

○ 會津の處置の儀は付奥羽の諸侯連名にて建言せし
とられども総督府にて取上げられあきよ付奥羽
一帯同盟一覺悟を極め官軍に向ひ殺伐の所業を為
しされば九条殿下も仙臺城に入りたまひ澤三位以
下の所々も屯せり又會兵の諸処も出沒せし者
これ迄の皆脱藩と稱せしが右等の故に或此頃も最
早立派に會津兵隊と稱しまた脱走と稱せざるより

